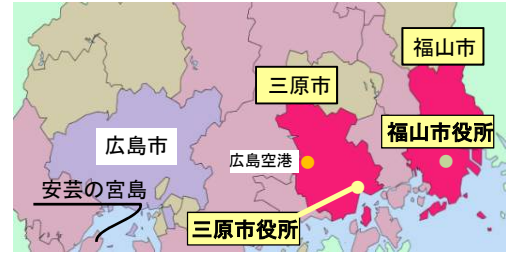


日程
 平成27年2月5日 広島県福山市 100万本のばらのまちづくりについて
 2月6日 広島県三原市 地域包括ケアシステム構築について
参加者 市民クラブ7名
 黒川智明、中嶋祥元、伊藤幸弘、沖野温志、山内智彦、鈴木浩二、佐原充恭



広島県三原市 視察内容:地域包括ケアシステムの構築について

視察目的

来年度から施行される、介護保険法改定により要支援1・2が市町村に段階的に移行される。現在(平成27年1月現在)の高齢化率は下表の通り。将来、刈谷市も高齢化率が30%近くとなる予想である。三原市での地域包括ケアシステムの構築内容を研鑽し、刈谷市の地域包括ケアシステムの参考にする。

三原市の状況

平成22年度データ	面積	人口	年少人口 0~14才	生産人口 15~64才	高齢人口65歳以上 (人口比)	高齢者の内、独・ 老々夫婦世帯数	
						要介護1,要支援 1・2の人数	
三原市	471.21km ²	101144人	12.20%	56.40%	28209人(27.9%)	10481人(57.5%)	3167人(49.1%)
刈谷市	50.45km ²	145781人	18.40%	66.50%	23179人(15.9%)	6879人(45.4%)	1460人(43.2%)

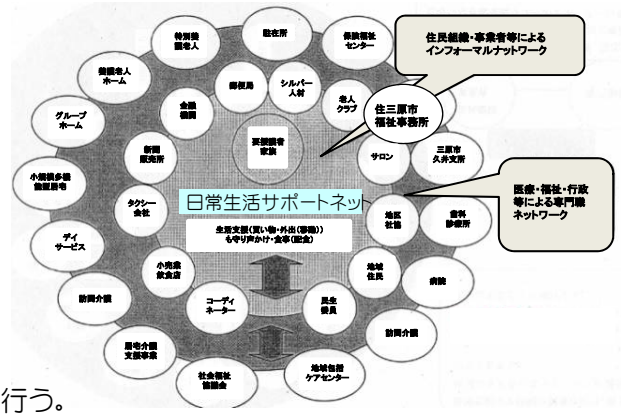
- 三原市は高齢化だけでなく、独居・老々夫婦世帯が5割を超え、他の支援を受け自宅で暮らせる世帯(要支援1・2及び要介護1)が65歳以上全体の5割近くいる状況。(介助を受け自宅生活できる認知症高齢者約4千人中47.6%)
- できるだけ自宅で暮らすための環境作りである地域包括ケアシステムが急務の状況にあった。

地域ケア体制構築モデル推進

自治体・住民組織、NPO法人、社会福祉法人、福祉サービス事業者等の連携により、県補助金(10/10)を活用する事で、地域住民主体の地域ケア体制構築に向けた取組を、モデル地区(久井町江木地区)を支援した。

〇住み慣れた地域で暮らすための委員会

誰もが“住み慣れた家や地域で暮らしたい”と希望しても、身体状況や生活環境(交通・買物・食事など)によって大きく影響がある。日常生活全てを介護保険・福祉サービスだけの支援には限界があることから、関係者※が集まり年6回話し合い、「地域で日常生活サポートネット」を構築した
 内容①介護保険制度などの勉強会②一人ひとりが無理をせずやれる事を話し合う



・日常生活サポートネットの活動から専門分野との連携

地域住民が地域にプラスになり、無理のない計画で、地域でできることを検討。介護保険・高齢者相談・お互い様活動・制度など窓口紹介も行う。この会議での集約意見を多職種協働ネットワーク協会(専門部会)へ具申

・活動成果と課題

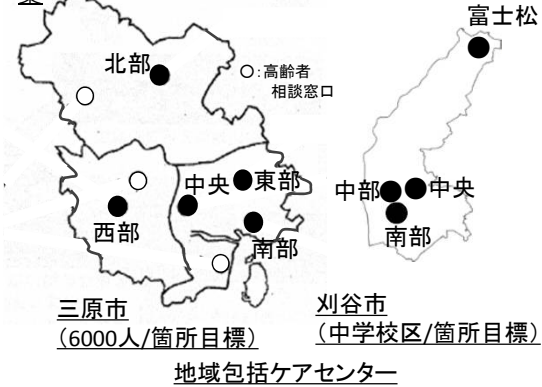
成果

- ①常設サロン立ち上げ(1回/週)・・・介護保険の利用方法や窓口案内
- ②見守り活動(1回/月食事を作り配食含む)・・・近所の10名前後/人を担当
- ③顔なじみづくり:ふれあい貯筋教室
 リハビリ専門医による軽体操を通じたコミュニケーションのづくり
 ↳利用者同志・サポーター側との顔なじみづくりを基本に場づくりを推進

課題

- ①地域が率先して活動しているが、各活動グループを複数掛け持ちで行っており、支える側も高齢化してきていることから、担い手を増やす施策と育成
- ②在宅医療や在宅介護の連携(自宅で最後を終える)

地域資源による連携体制の構築



所管 刈谷市も2025年以降に、三原市に近い状況を迎える予想。地域住民の活動は、目前の対応で地域を支えている事が、今回の視察でわかった。高齢化が進む中、老人クラブの入会者数は微増の状況にある。この状況の中で、ボランティアを募るといふ「待ち」の姿勢だけでは、追いつかないと考える。団塊の世代が70才代を迎え、介護対応がピークを迎える2025年以降の状況を予想し、それに対応する姿を描き、逆算して中長期計画を立案し、段階的施策を準備していく事が必要と考える。介護福祉は、国からの移行する中でやれる事は何かを整理していく。

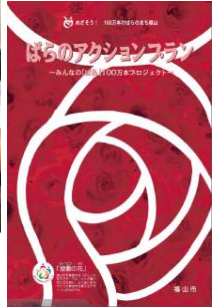
広島県福山市 視察内容: 100万本のばらのまちづくりについて

視察目的

少子高齢化が今後進む中、人口増を目的とし、刈谷市に住みたい・住み続けたいと思えるよう、魅力あるまちづくりを推進する必要がある。福山市は、「戦災で荒廃した街に潤いを与え、人々の心に和らぎを取り戻そう」と市民が公園にバラの苗木を1000本植えたことを機に、「バラのまち福山」まで発展させて。この施策・考え方を学び、刈谷市政に提案していく。

「福山市100万本のばら」までのあゆみ

- 1945年 大空襲でまちの殆どが荒廃し、その後終戦
- 1956年 「戦後の復興とまちに潤い」と市民がばらの苗を1000本植樹。行政が賛同し、ばらを通じた「協働のまちづくり」がスタート
- 1956年 市民活動でばら展示会開催
- 1957年 ばら公園整備着工。(1965年 現在のばら公園の姿に)
- 1968年 第1回ばら祭り開催 全国美しい街づくり最優秀賞を受賞 各地区に花壇整備に補助を出し、ばら公園的な花壇が拡大した。
- 1971年 開催ばら祭り委員会が発足。→市民総ぐるみの「福山ばら祭り」を開催
- 1985年 ばらを市の花に制定。翌年、「ローズ福山」誕生。
- 1993年 ばらを育てる事を通じ、思いやり・優しさ・助け合いの心を育む言葉「ローズマインド」が生まれる
- 2010年 **ばらのアクションプラン**策定。市民、各種団体、事業所、行政が協働を基調として活動する計画
目的①福山市の知名度向上 ②シンボルとなる拠点の充実・拡大 ③市民のバラに対する「想い」の共有



ばらのアクションプラン

プロジェクトの柱	植栽事業	普及啓発事業	サポート事業	「ばらのまち福山」PR事業
事業名	駅前広場・周辺駅前大通り 国道・幹線道路 公共・教育施設	入学等記念苗配布事業 ・入学・新築 ・新生児誕生 ※こども議会提案を採用 地域イベント	バラ大学 ばら花壇整備 出前講座・各種講習会 サポート冊子作成配布	ばらに関する情報発信 市民団体との連携活動 ローズロードの整備 バラサミットの取組、市政100周年事業 イメージキャラクターの活用 ばらの新種開発(名前:ウルヴァリンFUKUYAMA※)
各事業のトピックス	ばら植樹本数 353829本	新築配布件数(7年間) 5754戸、111887本(2本/1件) 地域イベント配布1万5千本	ばら大学修了生216名(3年間) ばら花壇120件申請(6年間) 出前講座110件/年、3600人参加	AKB48歌手 岩佐美咲 福山応援隊長 加藤登紀子 福山応援大使 ※福山でのハリウッド映画撮影記念で新種開発

「100万本のばらのまちづくり」福山市役所の庁内連携について

- 100万本のばらのまちづくり庁内連携会議
- 1) 関係部署が連携した取組を目的に29部署で2013年に設置
- ①100万本のバラのまちづくり推進専属部署を設置し統括する
- ②3つのプロジェクトチーム設置
 - ・地域連携ばらづくりプロジェクト(普及啓発)
 - ・ばらのまち福山発信プロジェクト→機運の醸成と知名度アップ
 - ・ローズロード創出プロジェクト→連携整備
- 連携事業について(公共性のある団体に協力要請)
山陽自動車道(福山SA)・JR福山駅・郵便局・コンビニにバラ植樹・プランタ設置



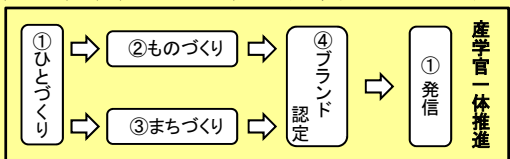
市職員ばら色の職服



成果と課題

- 成果
 - ・ばら栽培を市民に協力依頼：2013年度個人・団体合計2000件、1300本栽培
 - ・幹線道路へ：2013年度地域住民・団体・事業者17団体が約1000本植栽
 - ・バラ大学生受講生が毎年増加：77名受講中(2014年度)で過去最多
- 課題
 - ・周年記念事業に全員参加を目標に、市民・団体・行政が一体となる更なる取組推進

福山市都市ブランド戦略(展開のイメージ)



専門家等の支援
 ・PR・販路紹介
 ・審査・フィードバック
 ・開発・見せ方アドバイス
 ・知識・ノウハウ提供

都市ブランド戦略のポイント

その取組が誰のためで、そのニーズを調査し、創造性を持ってブランドづくりに取り組むこと。変化するニーズを把握し、取り組むの結果を検証する。継続的・戦略的なブランドづくりを、組織的に推進する。福山ブランド商品も開発・販路紹介など支援し、商品認定方式採用 福山ブランド認定商品 134品(2001年～2014年)



所管 福山市は、市民が行動を機に、広い世代・各種団体が一体となってばらのまちづくりを役60年掛けて発展させてきた。ローズマインドが、この地に触れる事で実際に感じられた。その取組は、都市ブランド戦略として定住人口を増やす狙いで、産学官と市民が一体となって推進している。都市ブランド戦略に記載した専門家等の支援する仕組みが、歴史資源を時代に合わせキャッチコピーに織り込むなど、クリエイティブにうまくアウトプットされている。このような組織的推進が必要と認識した。刈谷市に合った組織を探求し、提案していきたい。